

『ライプニッツ著作・書簡クロノロジー』序文

松尾 雄二

Preface to the Chronology of the Papers and Letters of G.W.Leibniz

Yuji MATSUO

I 著作と書簡の年表

このデータベースは既刊分のアカデミー版ライプニッツ全集やその他のライプニッツ全集・ライプニッツ著作集・書簡集等に基づいて、ライプニッツのすべての執筆物のタイトルと、日付と交信者名を明記したすべての書簡とを、哲学関係や数学関係や政治関係といった分野の別をすべて外して、年月日の順に並べて一覧に供することを意図している。

ライプニッツ全集の決定版であるアカデミー版は¹⁾1923年にベルリンで刊行が始まり、2002年現在37巻²⁾を数えてなお進行中である。

このように浩瀚な資料を編纂することは容易な仕事ではないであろう。その詳細は後にまわすが、さしあたって次に、アカデミー版全集の全体の構成と既刊本の巻数を紹介しておく。一巻の平均ページ数が約700ページであるから、それだけでも厩大な量に及ぶ³⁾。

第一部「一般的な政治・歴史書簡集」として17巻(2002年現在の巻数。以下同じ。)

第二部「哲学書簡集」1巻

第三部「数学・自然科学・技術工学書簡集」4巻

第四部「政治著作集」5巻(うち1巻は既刊の巻本に詳細な注等を付けたもの。)

第五部「歴史著作集」(進行中であり、すべて未刊。)

第六部「哲学著作集」8巻(うち、第4巻シリーズは全4巻—AからCまでの3分冊と、それらの索引、500ページの1分冊—。)

第七部「数学著作集」2巻

この編集方法は、全体をまず書簡集と著作集とに分け、ついでそれぞれを分野の違いによって政治、歴史、哲学、数学等の部に分けている。そして、それぞれの部については、年代的な順序に従って執筆物を第1巻から順に並べ、さらに各巻ごとにページを追って年月日順に並べている。

1849年から1890年にわたって刊行されたゲルハルト（Gerhardt）版ライプニッツ数学著作集ならびに哲学著作集は、現在も世界中の多くの研究者が利用しているが、その編集の仕方は、まず哲学著作集と数学著作集の大分類をなし、哲学については書簡集が3巻、そして哲学著作集、J・ロック関係、『弁神論』、そして普遍学や哲学論文集というようにまとめて、全7巻となっている。

1768年刊行のデュタン（Dutens）版全集の場合も、まず、神学、論理学、形而上学、数学、歴史、法学、そして言語学等に分類し、それぞれの分野で著作と手紙に分けて、年代順に並べている。

さて、一般にある哲学者の体系について、それが必然性をもつ主張であるとしてわれわれが理解する方法の一つに、その哲学者の理論展開の歴史をたどることがある。その趣旨に則って、ライプニッツの全集類が年代中心に編纂されることにもなる。戦後日本におけるライプニッツの体系的な研究の嚆矢となった山本信氏も、次のように言う。

「……ライプニッツの特異な資料事情が、ここに重大な困難をもたらす。彼には主著と言われ得る著作がなく、幾つかの纏まったものもそのときどきの特殊事情に制約されている。それでは、彼の体系を把握しようとする際の規準は、どこに求められるべきであろうか。断片的及至側面的にのみ與えられている資料から再構成されたものが、解釈者の恣意と歪曲を免れていると如何にして保証され得るであろうか。かかる事情は、ライプニッツ哲学の研究において思想発展史的考察が極めて大きな役割を占める所以である。」（1953年東京大學出版會『ライプニッツ哲学研究』、1975年複製版2ページ）。

ただし、執筆物が多量になればなるほど、忠実に年代的に並べるという原理を守ることが困難になり、どうしても、分野に分類して、それぞれの分野について、別々に、年代的な編纂をせざるをえない。

すると、とたんに横の分野との対照が困難になるのである。例えば、ライプニッツのある時期に数学上での画期的な発見（微積分法の発見など）が進行つつあったとき、同時に哲学や論理学の分野ではどのようなアイディアの変化があったのか、これが当然問題になるであろうが、その相互対照が容易ではなくなる。

また、著作と書簡を分離したり、また分野を分けてしまうと、多種多様の書簡の通信がライプニッツにどのようなヒントを与え、またアイディアがいつどの手紙にすでに現れていたか等、比較対照が困難となる。

もともと、哲学が数学、生物学、物理学、神学、法学、政治学等、多くの他の分野とのつながりをもつことは、伝統の示すところであるが、とくにライプニッツにおいてこれが顕著に認められる。彼は同時代人から、一人でヨーロッパの「百科全書」の役割をしている、と評された。百科全書の形式として今日われわれが目にするようなアルファベットやあいうえお順の項目の並びではなく、内的な連関をもった百科全書である。あらゆる学問が有機的に繋がるからこそ、ライプニッツは多方面にわたって知的・実践的な関心を広げざるをえなかったのではないか。そして、元来、哲学はそのような繋がり の原理を探求するものであろう。

また、彼の時代においては、公刊された大小の著作やアカデミックな定期雑誌への寄稿論文だけでなく、手紙による交信が学術上の情報源として重要な役割を果たしているが、これもとくにライプニッツにおいて著しい。

すると、上述のような編纂方法がやむを得ないとはいえ、これでは、例えば、若きライプニッツがパリ滞在中に（1672年から1676年まで、4年半）数学の研究に大きな進展を見せていたとき、同時に数学以外に何を研究していたか、別途にどのような専門家と共に研究を重ね、議論を交わしていたか、そして手紙をやり取りしていたか等を、一望の下に把握することはできない。多くの分野に早熟であった彼は、数学のみならず、数学とつながりをもつ論理学や哲学や物理の領域で、そしてまた形而上学に関しても、この時期に大きな進歩を見せているし、その後の進展の確かな基礎を敷いていた、と推測されるのである。

パリでの研究時期だけではなく、その前後についても、多くの思想の大小の微妙な展開があることは疑いえない。

それらのアイデアを書き記した物や手紙のやり取りが、時々刻々、どのように推移しているか、すべてを年月日順に一望の下にできたら、ライプニッツの研究に、そして哲学の関連する諸科学とそれらの歴史の研究に、益すること大であろう。

そのために、私は、彼の執筆物すべての目録を、基本的にはアカデミー版全集の記載に拠りながら、分野等の枠を外して年月日順に並べることを考えた。このさい、執筆物の原文の詳細は犠牲にせざるをえない。目録だけになるが、そのなかにはもちろん、交信先の名前を添えた往復書簡も含んで、すべてを年月日順に並べることになる。書簡については交信相手の名前によって、内容へのヒントが与えられている。このクロノロジーには付録としてライプニッツの関係した人々の簡単な紹介を付けるから、それと対照させながら、必要なものについて原典に当たることができるはずである。また、それ以外の執筆物については多くはすでに題名が付いているし、そうでないものについては、書き出しの一行を充てて理解に資することにした。

また、多くの利用者が各種のアカデミー版以外の原典や翻訳で確認できるように、一件一件について、既刊の他の著作集や全集を照合し対応させているし、さらにできるだけ多くの英・独・仏・和の翻訳書を照合させて、必要事項を併記しておいた。日本でアカデミー版の既刊本をすべて所蔵している大学はきわめて少ないであろうし、これをゲルハルト版のようにかなり行き渡っている著作集、ならびに諸翻訳と対応させれば、多くの研究者に便利ははずである。

この種の、アカデミー版等に基づいたライプニッツの全執筆物についての年表は、まだ世界に例がないと思われるし、また日本にもこの種の仕事はない。ライプニッツの全執筆物のほとんどを所有しているドイツでは、このような趣旨で作られた本が、二三ある。しかし、いずれも不十分である。

1. Emile Ravier, *Bibliographie des œuvres de Leibniz*, 1937. (『ライプニッツ著作の書誌』)

これはライプニッツによる執筆物のうち、死に至る1716年までの公刊物のタイトルを、単行本および「ライプツィヒ学報 (*Acta eruditorum Lipsiensium*)」等の学術雑誌掲載のものに

ついて、クロノジカルにもれなく並べ、それぞれについて当時の全集等のページ付けを記したものである。ページ付けの細かい間違いがわずかに散見される⁹⁾が、周到であり、かなり信頼に値する。しかし、生前の公刊物はライプニッツの執筆物のほんの一部にすぎない。生前未公刊の執筆物の多くが、多量の手紙も含めて、全く範囲外である。

2. Kurt Müller und Gisela Krönert, *Leben und Werk von G.W. Leibniz, eine Chronik*, 1969. (『ライプニッツ著作・生涯年表』)

これはライプニッツの生涯の詳細な履歴を中心に、ライプニッツ生前の公刊著作ならびに未公刊著作のタイトル、雑誌掲載論文のタイトル、そして多くの文通相手との交信開始日（と終了時期）、重要な手紙についてはその簡単な内容を、クロノジカルに並べたものである。著作名については相当の量を網羅していると言ってよいし、生涯の軌跡を年表風に通覧するのに最適である。ミュラーはアカデミー版全集の編集代表者の一人でもある。しかし、手紙については、たとえばアントワヌ・アルノーとのやり取りが、いつといつ、合わせて何回あったか、ということがわからないし、これについて原典のどこを調べたらよいのか、指示がないのが残念である。

その他、ゲルハルト版哲学著作集が現在 CD-ROM 版で出ているから、これに基づいて、またこれに数学著作集や数学書簡集を加えて⁹⁾、年表を作成することも可能であろう。しかし、ゲルハルト版を第一次資料にすれば、まず、哲学と数学関係に限定されるので、その他の、神学・法律・政治・言語等の多くの分野が無視されることになる。例えば、教会統一をめぐる交信やアカデミー設立の交信（このなかには諸科学の理念等、哲学的に重要なものが含まれているはずである）や法律関係のものは原則としてないわけであり、もしそれらの中に哲学上の問題に触れているものがあつたとしても、まったく無視されることになる。

また、100年以上も昔の編集になるこの版には、日付等の誤りが散見される。すると、微積分の優先権争いが問題のようなときには、ライプニッツとニュートンが、そして両者のなかに入った人々、例えばオルデンブルク等が、いつ手紙をやり取りしたのか、正確な日付がきわめて重要となるだけに、決定的な新しいアカデミー版に依拠しない手はないのである。

さらに、暦日の問題がある。フランス、イタリア等のカトリック諸国とドイツ、イギリス等では暦に10日のずれのあることも考慮に入れなければならない。ハノーヴァー公国を初めとするドイツ諸邦は1700年の2月に、イギリスの場合は1752年に、それぞれグレゴリオ暦に従った。このズレを正確に把握するという点で、ゲルハルト版が現在のアカデミー版に比して周到であったとはとても言えないのである。

ここに用意するデータベースは、第一次資料として最新かつ周到なアカデミー版全集に拠る。そして万学に通じた天才ライプニッツの残した文献であるから、哲学のみならず、科学史、政治史、学会（アカデミー）史、ヨーロッパ宮廷史、キリスト教史等、ライプニッツの関わったすべての領域の各専門家にも、研究の資料を与えることになるろう。

II ライプニッツの書簡集の意義

ライプニッツはぼう大な量にのぼる執筆物を残している。生前公刊された書物だけでなく死後公刊された書物も、哲学、神学、論理学、物理学、歴史、言語学、外交文書、等々数多い。また、定期的な論文輯に寄稿した論文も、数学、物理学、哲学等多方面にわたり、その数は100篇を越える⁷⁾。

しかし、膨大な量の執筆物の半分以上が、先に触れたアカデミー版の編集に見られるとおり、実は書簡集である。ライプニッツは死ぬ寸前まで実に多くの手紙を、それも学問的・政治的にレベルの高い内容の手紙を書き続けた。相変わらずの発信が突然途絶えるのは、数学者ヤコブ・ヘルマンにあてた手紙(1716年11月2日)以降であり、この日付は彼の死までわずか11日を数えるのみである。

ところで、現代のわれわれから見ると、手紙というのは一個人あての、私的な内容のものであると思われるかもしれない。あまり人の目に触れることのないようなものに思われるかもしれない。事実はまったく異なる。

ライプニッツが1677年の年頭にハノーヴァー公爵あてに書いた手紙を見てみよう。手紙類がいかに重要な記録であるかを、また手紙という形で記録を後世に残すということの意義を、これは十分に示している。

この手紙を書いた1677年1月までの経緯は次のとおりである。

ライプニッツは学問の花の都パリにおいて⁸⁾、誠に実り豊かな研究と学者たちとの交流を切り上げ、30才にしてハノーヴァー公国(ブラウンシュヴァイク=リュネブルク)ヨハン・フリードリヒ公爵の下に仕えることを決心した。1676年10月にパリを発つ。途中、ロンドンに10日ばかり滞り、王立協会(ロイヤル・ソサイアティ)を何度か訪問したようである。さらにオランダに渡り、スワムメルダム⁹⁾やフッデ¹⁰⁾、そしてもちろんのことスピノザに会う。スピノザには用意した書き物を見せ、議論を交わす。スピノザ他界のわずか三カ月前のことである。そして11月の末にハノーヴァーに到着する。以後、ライプニッツがこの世を去るまで、40年間、ハノーヴァー公国に仕えることになる。

赴任してまもなく新しい年になり、彼は主君への年頭の挨拶を書簡の形で認めるのである。

「年頭に当たり……私の抱いております計画を、ある程度十分に、ご説明申し上げる時と存じます。その計画は二つに分かれます。……一つは、……誰が見てもきわめて学殖あるヨーロッパの数々の著名人との、直接、間接の書簡交信であり、私はすでにその基礎を敷き、その一部を始めております。名前を挙げれば、イタリアではキルヒャー神父¹¹⁾、サン・ピエトロ大寺院の聴罪司祭ファブリ神父¹²⁾、ブレシャ¹³⁾のラナ神父¹⁴⁾、大旅行家、収集家のボコネ氏¹⁵⁾。

フランスではシュヴルーズ公爵¹⁶⁾、ロアネ公爵¹⁷⁾、国王の聴罪司祭のラ・シェーズ神父¹⁸⁾、アルノー氏、また交際の榮譽をいただいている第一級の方々。なかでも王立図書館司書のカルカヴィ氏¹⁹⁾。コルベール氏の下で働き、また氏の親友でもあるガロア師²⁰⁾、コルベール氏の図書館司書バリュエズ氏²¹⁾。旅行記で有名なテヴノー氏²²⁾。建築監査官ペロー氏²³⁾、ディジョン高等法院の参事官ランタン氏²⁴⁾とラ・マール氏²⁵⁾、シャトレの参事官アルディ²⁶⁾氏、王立天文台長のカッシーニ氏²⁷⁾、その他、交信をいただいている大勢の高名な人たちであります。

イングランドでは王立協会の事務局長²⁸⁾および幾人かの会員たちと長い間交信をしておりますし、加えて、私がこの協会の会員になって、今4年になります²⁹⁾。

オランダでは振り時計の発明者であり、その兄がオレンジ公国の秘書であるズーリヘム³⁰⁾のホイヘンス氏³¹⁾、今世紀第一の数学者であるアムステルダム市の市長フッデ氏³²⁾、言うまでもなくハーグのスピノザ、ライデンのクラネン³³⁾、デルフトのレヴェンフック³⁴⁾、等であります。

ドイツではリンカー³⁵⁾、ハッベウス³⁶⁾、シュトラオホ³⁷⁾、コンリング³⁸⁾諸氏。帝国官房補佐マウリティウス³⁹⁾、最高法院参事官ポルトナー⁴⁰⁾、ザクセン選帝侯首班ガイヤー⁴¹⁾、プラハのイエズス会士コハンスキー⁴²⁾等の諸氏。その他、諸公の宮廷や大学において、その地位と学識によって傑出した数多くの人物です。もちろん、当地の私の友人も数多くおります。上に挙げた人々に較べるとさほど有名ではありませんが、いずれ評判を得るであろう人々が含まれており、肩のこらない付き合いのため、むしろ多くの場合やり取りが容易であり、また有益です。

これが、言葉だけの、裏付けのない約束と思われぬように、上に述べた人々の一部から、三十通の書簡によって、真実のところをお示しいたします。一週間もしないうちに、お渡しすることになりましょう。」(1677年1月、ライプニッツからヨハン・フリードリッヒ・ハノーヴァー公爵あて⁴³⁾)。

このライプニッツの手紙は、彼を招聘したヨハン・フリードリッヒ公爵への、赴任してまもなくの、いわば職務誓約の一部である。かれは書簡の交信を自分のなすべき大きな仕事と見なしている。フランスの宮廷、国王筋、そして歴史に名を残すことになる多くの学者たち、イングランドの王立協会のメンバーをはじめとする人々、神聖ローマ帝国の要人、その他オランダをはじめとする国々の重要人物たちとの書簡が、すでにライプニッツとの間で交わされており、この種の交信をさらに発展させる決意が、この年頭の挨拶文で表明されている。

この手紙自身が示すように、これは公国の主君に対する赴任後の仕事の宣誓を含む一種の公の文書である。

学者間の手紙のやり取りの場合には、当時、基本的には、公表されることを承知の、研究業績の公開的な交信を意味した。特別の場合、例えば数学で起こりうる発見の先取権が微妙にからむようなときには、暗号(アナグラム)が使われた。多くの場合、手紙を受け取ると、そのコピーが作られ、少なからぬ識者たちに回覧される。こうすることによって、議論されている問題についての様々な意見や疑義や反論、そしてさらなる積み上げ等が、発信者等に寄せられる。レベルの高い専門家のやり取りのなかには、その往復書簡が多くのの人々のための教養的な必読書や研究のテキストともなった。聖書の「パウロの書簡」という古典中の古典が示すように、ヨーロッパにはこのような伝統があったことを思い起こそう。

この種の手紙をもらうということは、いずれは活字となって公刊される性格のものをいち早く手にすることを意味し、またその保有は蔵書と似た性格をもったであろうことはもちろんであるが、ライプニッツからの手紙を個人で持っていることをヨーロッパ人は自慢にした、とも言われる。

もう一つ。次の事実は、手紙のやり取り形式による学者間の研究交流や情報交流が、公の大きな意味をもったことを示すものである。

すなわち、書簡の往復にさいして、第三の重要な人物が、場合によっては公国や国家を代表するような人物が、介在することがあった、ということである。

例えば、イングランド王ジョージ一世の皇太子妃キャロライン（カロリーネ）である。ライプニッツの仕えるハノーヴァー公爵は最初がヨハン・フリードリヒ公爵（1679年死）、二代目がその弟エルンスト・アウグスト（1698年死。1692年に選帝侯になる。）、三代目がゲオルク・ルートヴィヒ（1727年死）となる。ゲオルク・ルートヴィヒは1714年から大英帝国国王ジョージ一世となってイギリスに渡り大英帝国とハノーヴァー選帝侯国双方の君主を兼ねる。1727年、ジョージ一世の薨去後、その嗣子ゲオルク・アウグスト（ジョージ二世）が国王となるが、その王妃がキャロラインである。彼女は若い頃からベルリンの宮廷におり、そこにしばしば訪れていたライプニッツから指南を受けていた。

皇太子妃としてイギリスにいたキャロラインを介して、ライプニッツとクラーク（ニュートンの代弁者）との書簡の往復（1715～1716年）がなされたのである。神学、哲学、科学の方法論をめぐる両者の大論争は、ヨーロッパの学会を二分したとも言われるが、往復書簡の受け渡しの役をしたのが彼女であった。

また、ヘッセン・ラインフェルス辺境エルンスト伯爵を介して、大アルノー（『省察』に対してもっとも鋭い「反論」を寄せてくれた、としてデカルトがほめた。）との往復書簡が成った。後年「形而上学叙説」と名付けられるものの概要をめぐって、アルノーの「反論」とライプニッツの「答弁」が1686年から2年半のうちに20余回繰り広げられた。この往復書簡を付けて、実体間の交わりと心身の合一についての思想（いわゆる『新説』）を公刊したい、とライプニッツはS・フーシェに告げている⁴⁴。

また、イギリスの王立協会秘書のオルデンブルクを介して、ニュートンやコリンズやウォリス等、イギリスの著名な数学者たちとの交信があったことも付け加えておこう。

このように第三の人物を介して間接的に手紙のやり取りがなされる場合、第三の人物に対しては、たとえば「エルンスト伯爵あて（an Landgrafen Ernst, à comte Ernst）」と記され、本来の相手に対しては、たとえば「アルノーへ（für Arnould, pour Arnould）」と記される。そして、問題の書簡が追伸文、追加論文（=Beilage。ときどきその後に論文のタイトルが付く。）として続くのである。このように、「～あて ‘an, à’ 」と「～へ ‘für, pour’ 」によって区別されることも多いので、私の本文もそのとおりに訳出している。

ライプニッツの書く手紙は、発送される前にそのコピーが作られ、受け取った返事と共に保管されることが多かった。書簡交信の成果を保管しておくことは、単に後世の人たちがその時代の学問のレベルや政治情勢を知る第一級の資料にとどまるのではない。新時代の取るべき道を同時代の人々に示す道標ともなる性格のものである。さらに、後世の学者たちが古典として研究して、その上に立ってさらなる進展を得るためのものともなる。ライプニッツの場合、まさしく両方の役割を果たしたのである。

先の手紙においてライプニッツは、全ヨーロッパの学問、科学、政治、宗教等に関して、書簡の交信を介してこのようなことを成し遂げたいということ、それもハノーヴァー公国の廷臣として成し遂げたい、という計画を、赴任早々、年頭の所感として、ヨハン・フリードリヒ公爵に提言しているわけである。

ライプニッツは、この手紙に名前が出ていない著名人とも、すでに交信の機会をもっていた。今日われわれの時代まで良く知られている人物としては、例えばマグデブルグ球の実験者ゲーリック、数学者ニュートン⁴⁵⁾、哲学者マルブランシュ等である。国際法学者S・プーフェンドルフにも発信しているが、返信を得て交信に至るのは後年1690年ころから、数回である。

その後生涯にわたって、ライプニッツは公爵へのこの職務誓約を違うことなく、ヨーロッパ各地の学者や著名人と書簡を交信し続けることになる。その交信相手数は1100名を超えと言われる⁴⁶⁾。多いときは一日に11通の交信（うちライプニッツからのものが7通）があり、多い年、たとえば1697年の場合、一年間の往復書簡数は、現在知られているだけでも1000通あまり、うちライプニッツ発のものが320通あまりに達する。

ハノーヴァー宮廷の図書館長でもあったライプニッツは、このようにして、膨大な量の書簡交信を、ハノーヴァー公国の財産として保管することにもなったのである。死後、これらの書簡集が少しずつ公刊されることになるが、ライプニッツの生前は公刊されることがほとんどなかった。「私について、公表されたものだけで知る人は、私を知らない。」(1696年3月3日/2月21日、V・プラッキウスあて⁴⁷⁾)とライプニッツ自ら言う。⁴⁸⁾

ぼう大な量の手紙を一人で通読する事は不可能であろう。その代わりに、交信の相手をはっきりさせておいて、手紙をクロノジカルに並べることによって、ライプニッツがどのような分野について、いつ思索し、また他人に公表するに至ったか、その思索がどのような軌跡をたどっているか、ある時期ある問題をめぐる周辺の関心事は何だったか、このようなことについて、このデータベースによってある程度うかがうことができようし、必要に応じて原文に当たることが可能となる。

なお、欧語人名等の表記はアカデミー版全集の索引とミュラー前掲書による。日本語名表記は主に工作舎刊のエイトン前掲書ならびに『ライプニッツ著作集』に拠った。

III アカデミー版全集

このデータベースの典拠は主にアカデミー版ライプニッツ全集の既刊分37冊（2002年現在）とミュラー他著『ライプニッツ著作・生涯年表』（1969年刊）である。アカデミー版は、20世紀、徹底した資料収集と考証がほどこされ、ライプニッツ全集の決定版になるものである。執筆の日付、手紙類の日付は、ゲルハルト版よりもはるかに精確になっている。既刊分は以下のとおりである。なお、1954年以降刊行のものには、一件一件に他の全集や著作集のページ数、英訳等、もしあれば、付記されている。

Gottfried Wilhelm Leibniz, Sämtliche Schriften und Briefe. Herausgegeben von der Berlin-Brandenburgischen Akademie der Wissenschaften und der Akademie der Wissenschaften in Göttingen.
 () 内は初版刊行年と、リプリント刊行年を示す。

Reihe I: Allgemeiner politischer und historischer Briefwechsel (第一部: 一般的な政治・歴史書簡集)

- 1.1ster Band, 1668-1676 (1923, 1970)
- 1.2 1676-1679 (1927, 1970)
- 1.3 1680-1683 (1938, 1970)
- 1.4 1684-1687 (1950, 1990)
- 1.5 1687-1690 (1954, 1970)
- 1.6 1690-1691 (1957, 1970)
- 1.7 1691-1692 (1964)
- 1.8 1692 (1970, 1992)
- 1.9 1693 (1975, 1992)
- 1.10 1694 (1979)
- 1.11 1695.1-10 (1982)
- 1.12 1695.11-1696.7 (1990)
- 1.13 1696.8-1697.4 (1987)
- 1.14 1697.5-12 (1993)
- 1.15 1697.12-1698.9 (1998)
- 1.17 1699.5-1699.12 (2001)
- 1.18 1700.1-8 (2003予定)
- 1.Supplimentband, Harzbergbau 1692-96 (ハルツ鉱山関連) (1991)

Reihe II: Philosophischer Briefwechsel. (第二部: 哲学書簡集)

- 2.1ster Band, 1663-1685 (1926, 1972)

Reihe III: Mathematischer naturwissenschaftlicher und technischer Briefwechsel. (第三部: 数学・自然科学・工学書簡集)

- 3.1ster Band, 1672-1676 (1976)
- 3.2 1676-1679 (1987)
- 3.3 1680-1683.6 (1991)
- 3.4 1683.7-1690 (1995)
- 3.5 1691-1693 (2003予定)

Reihe IV: Politische Schriften. (第四部: 政治著作集)

- 4.1ster Band, 1667-1676 (1931, 1971)
- 4.1 1667-1676 (1983)
- 4.2 1677-1687 (1963)
- 4.3 1687-1689 (1986)
- 4.4 1680-1692 (2001)

Reihe V: Historische Schriften. (第五部: 歴史著作集)

Reihe VI: Philosophische Schriften. (第六部：哲学著作集)

6.1ster Band, 1663-1672(1930, 1990)

6.2 1663-1672(1966)

6.3 1672-1676(1980)

6.4 1677-1690.6 Teil A(1999)

6.4 1677-1690.6 Teil B(1999)

6.4 1677-1690.6 Teil C(1999)

6.4 Verzeichnisse, 1676-90.6(1999)

6.6 Nouveaux essais sur l'entendement humain. (『人間知性新論』) (1962)

Reihe VII: Mathematische Schriften. (第七部：数学著作集)

7.1ster Band, 1672-1676 Geometrie-Zahlentheorie-Algebra (1.Teil) (1990)

7.2 1672-76, Algebra (2.Teil) (1996)

IV 未刊のもの処理方法

アカデミー版の未刊の部・巻を並べると、

第一部「一般的な政治・歴史書簡集」は第16巻1698年10月から1699年4月までと、1700年以降1716年の彼の他界まで

第二部「哲学書簡集」は1686年以降

第三部「数学・自然科学・工学書簡集」は1691年以降

第四部「政治著作集」は1693年以降

第五部「歴史著作集」はすべて未刊

第六部「哲学著作集」は『人間知性新論』を除いて1690年7月以降

第七部「数学著作集」は1677年以降

ということになる。アカデミー出版社が直接報せてくれた情報⁴⁹⁾によれば、全体で100巻もしくはそれを少し超えるであろうと言う。

アカデミー版で未刊の部分については、以下の全集類を典拠とし、さらにミュラー他著『ライプニッツ著作・生涯年表』(1969年刊行)と照合して追加や修正を行った。刊行年代順に挙げ、それぞれの略号を付す。

1768 Dutens, *Leibnizii opera omnia nunc primum collecta, in classes distributa, praefationibus et indicibus exornata*, studio Ludovici Dutens, 5 tomi, Genf. → Dut.

1838-40 Guhrauer, *Leibniz; Deutsche Schriften*, 1-2. → Guh.DS

1840 Erdmann, *Leibnizii opera philosophiae, quae extant latina, gallica, germanica omnia.*

Faksimiledruck der Ausgabe 1840 durch weitere Textstücke ergänzt und mit einem Vorwort versehen von Renate Vollbrecht, 1974, Scientia Verlag Aalen. → Erdmann

- 1849-1855 C. I. Gerhardt, *Leibniz; Mathematische Schriften*, 7 Bände. → GM
- 1854 Foucher de Careil, *Lettres et opuscules inédits de Leibniz*. → FC:LO
- 1857 Foucher de Careil, *Nouvelles lettres et opuscules inédits de Leibniz*. → FC:NLO
- 1859-1875 Foucher de Careil, *Leibniz; œuvres*, 1-7. → FC
- 1860 C. I. Gerhardt, *Briefwechsel zwischen Leibniz und Christian Wolff*. → GBW.
- 1860 Carl Haas, *G.W. Leibniz, Theologisches System*, 1966 Georg Olms reprint. → Haas
- 1864-1884 Onno Klopp, *Die Werke von Leibniz, Erste Reihe, Historisch-politische und staatswissenschaftliche Schriften*, Band 7-11. → Klopp
- 1875-1890 C. I. Gerhardt, *Leibniz; Die philosophische Schriften*, 7 Bände. → G
- 1889 Eduard Bodemann, *Die Leibniz-Handschriften der Königlichen öffentlichen Bibliothek zu Hannover*, 1966, reprint. → BodH
- 1890 Ludwig Stein, *Leibniz und Spinoza*. → Stein
- 1895 Eduard Bodemann, *Der Briefwechsel des G.W. Leibniz in der Königlichen öffentlichen Bibliothek zu Hannover*, 1966, reprint. → BodB
- 1899 C. I. Gerhardt, *Der Briefwechsel von G.W. Leibniz mit Mathematikern*. → GBM
- 1902 J. Baruzi, *Trois dialogues mystiques*. → Baruzi
- 1903 Louis Couturat, *Leibniz; Opuscules et fragments inédits*. → Cout
- 1906 Ernst Gerland, *Leibniz; Nachgelassene Schriften Physikalischen, mechanischen und technischen Inhalts*. → Gerl
- 1914-1924 *Catalogue critique des manuscrits de Leibniz*, 1672. 3~1676. 11, Poitiers. → Cata
- 1937 Emil Ravier, *Bibliographie des œuvres de Leibniz*. → Ravier
- 1948 Gaston Grua, *Leibniz, Textes inédits d'après de la bibliothèque provinciale de Hanovre*. → Grua
- 1952 Geneviève Rodis-Lewis, *Lettres de Leibniz à Arnauld, d'après un manuscrit inédit*. → Rodis-Lewis
- 1955 André Robinet, *Malebranche et Leibniz. Relations personnelles*. → Robinet
- 1969 Paul Schrecker, *G.W. Leibniz, opuscules philosophiques choisis*. → Schrecker
- 1971 Stiftung Volkswagenwerk, *Leibniz-Faksimiles*. → Faksimiles
- 1973 H. J. Zacher, *Die Hauptschriften zur Dyadik von Leibniz*. → Zacher
- 1982 R. Haase, *Der Briefwechsel zwischen Leibniz und Conrad Henfling*. → Haase
- 1985 Jean Peyroux, *Leibniz, Œuvre concernant la physique*. → Peyroux
- 1985 G. W. Leibniz, *Philosophische Schriften*, Band 1-3, herausgegeben und übersetzt von Hans Heinz Holz und Herbert Herring. → Herring
- 1990 R. Widmeier, *Leibniz korrespondiert mit China*. → Wid

このうち、デュタンの全集は、1768年出版と古いですが、現在われわれが手にすることができる全集のなかでは、哲学、数学を含めた全分野にわたり、また全生涯にわたる最も完全な全集である。決定版であるアカデミー版がまだ全集の半分にも至っていないため、デュタンのものは今なお貴重な全集である。そのなかにはハルツ鉱山の開発を指揮したさいに得られた発掘資料に基づいた『プロトガイア』⁵⁰⁾ という地学的な書物も含まれ、また神学者デ・ボスによる

ラテン語訳の『弁神論』等、また「ライプツィヒ学報」のような学術雑誌に寄稿したライプニッツの論文が含まれている。

既述のとおり、1954年以降のアカデミー版には、執筆物一件一件について、既存の全集等のページ付けがある。私はこれとは独立に、上掲のすべての書物について、日付の分かる件はすべて、対応するアカデミー版のページに当たり、併記した。その結果、アカデミー版のわずかの誤りも、訂正することができた。

V グレゴリオ暦の暦日

このデータベースではミュラー上掲書やエイトン著『ライプニッツの普遍計画』(E.J.Aiton, *Leibniz. A Biography*, 1985. 和訳は渡辺正雄他訳、工作舎1990年刊)の方法にならって、一貫してグレゴリオ暦の日付を採用した。アカデミー版既刊37冊の場合、ユリウス暦日付の執筆物についてはグレゴリオ暦の日付が併記されているので、後者に従って配列した。

アカデミーで未刊行の著作、書簡については、典拠としたその他の全集類のなかで付されている日付がユリウス暦かグレゴリオ暦か、しばしば不明である。アカデミー版以外の全集類に依拠したときには、種々の版を照合し、また手紙の発信地によって(例えばアムステルダムやハーグはグレゴリオ暦を早くから採用した)、ユリウス暦であるかどうかを推定し、ユリウス暦であればグレゴリオ暦に直して配列したあと、混乱が予想される場合にのみユリウス暦を併記した。

ちなみに、グレゴリオ暦とは、1582年10月4日の翌日を10月15日として、暦と天文現象とのずれを直した、ローマ教皇グレゴリウス13世による改暦であり、まずイタリア、フランス、スペイン等のカトリック諸国で施行された。また、以後天文現象と暦との間にずれが生じないように、4で割り切れるすべての年のうち、100で割り切れ、かつ400で割り切れない年については、ユリウス暦に入っていた閏日2月29日を入れないで、閏年とはしない、というものであった。したがって1600年には閏日があったが、1700年には閏日がなかった。ドイツの諸邦では1700年2月18日の翌日を3月1日とし、グレゴリオ暦に改暦した(もちろん、このデータベースはグレゴリオ暦によって配列したのでこの年の2月19日から28日までの日付がある)。

この間、ライプニッツは、本拠地ハノーヴァーにいるとき、手紙や著作にユリウス暦の日付を付し、場合によってはユリウスとグレゴリオ双方の日付を付した。1672年から76年までパリにいたときや、1687年から1690年にわたるイタリア方面大旅行中、またウィーンやローマに滞在のときは、グレゴリオ暦の日付を使っている。

他方、オランダ発ホイヘンスからの手紙や神聖ローマ帝国の首都ウィーンのポルトナー、また同じく帝国の都市ワルシャワのコハンスキーからの手紙はグレゴリオ暦の日付である。

イギリスの場合、改暦がさらに半世紀遅れる。したがって1700年はイギリスでは閏年であり、2月29日がある。それ以降、ドイツをはじめ改暦済みの国々との暦のずれは11日となる。

これらの10日ないし11日の違いは看過できないため、年月の前の日付は1/11と記されたり、日付のあとに旧暦を示す‘VS’ (Vetere Stilo、またはVetere Stylo) か新暦を示す‘NS’ (Novo Stilo、またはNovo Stylo) が付け加えられていることもある。

このデータベースで、知られているかぎり書簡交信の発信地を載せたのは、主に、発信地によって手紙に記された日付がユリウス暦かグレゴリオ暦か分かる、という理由による。

VI 種々の翻訳

その他、英訳と和訳等のあるものはできるだけページ数を併記したので、その書名を以下に示しておく。しかし、私の知らない、また手に入らなかった訳書が多くあることと思う。このデータベースを不断に追加・改訂していけるように、利用者の修正や追加をお願いしておく。

- 1896 Alfred G. Langley, *Leibniz, New Essays concerning Human Understanding*. → Langley
- 1902 George Montgomery, *Leibniz, Discourse on Metaphysics. Correspondence with Arnauld*.
Open Court.
- 1906 Artur Buchenau, *Leibniz; Hauptschriften*, 2 Bände. → Buche
- 1915 Ernst Cassirer und C. Scharschmidt, *Leibniz, Neue Abhandlungen über den menschlichen Verstand*. Philosophische Bibliothek
- 1925 Artur Buchenau, *Leibniz, Die Theodizee*, Philosophische Bibliothek.
- 1951 Philip P. Wiener, *Leibniz, Selections*. Charles Scribner's Sons.
- 1952 E.M. Huggard, *Leibniz, Theodicy*.
- 1958 Herbert Herring, *Leibniz, Metaphysische Abhandlung*. Philosophische Bibliothek.
- 1965 Paul Schrecker and Anne Martin, *Leibniz, Monadology and Other Philosophical Essays*.
- 1966 G.H.R. Parkinson, *Leibniz, Logical Papers*.
- 1966 Paul Schrecker, *Leibniz, Opuscula philosophica selecta*.
- 1967 Otto Saame, *Leibniz, Confessio philosophi*.
- 1967 H.T. Mason, *Leibniz-Arnauld Correspondence*, Manchester University Press.
- 1969 Kurt Müller und Gisela Krönert, *Leben und Werk von Leibniz. Eine Chronik*. → Müller
- 1969 Paul Schrecker, *Leibniz, Opuscules philosophiques choisis*.
- 1970 Y von Belaval, *Leibniz, Confessio philosophi*.
- 1973 Pierre Costabel, *Leibniz and Dynamics. The Texts of 1692*. (1960フランス語版の英訳)
- 1970 Georges Le Roy, *Leibniz, Discours de métaphysique et correspondance avec Arnauld, introduction, texte et commentaires*.
- 1973 Alain Chauve, *Leibniz, les deux labyrinthes, textes choisis*.
- 1973 Parkinson and Mary Morris, *Leibniz; Philosophical Writings*. → Parkinson
- 1976 Loemker, *Leibniz; Philosophical Papers and Letters*, 2nd ed.. → Loem
- 1977 Waterman, *Leibniz and Ludolf on Things Linguistic*. → Waterman
- 1977 Henry Jr. Rosemont & Daniel J. Cook, *Leibniz, Discourse on the Natural Theology of the Chinese*.
- 1981 P. Remnant & J. Bennett, *Leibniz, New Essays on Human Understanding*.
- 1982 Franz Schupp, *Leibniz, Allgemeine Untersuchungen über die Analyse der Begriffe und Wahrheiten*. Philosophische Bibliothek.
- 1982 Hans Günter Dosch, *Leibniz, Specimen dynamicum*. Philosophische Bibliothek.

- 1985 Jean Peyroux, *Leibniz, Œuvre concernat la PHYSIQUE*.
- 1987 Marcelo Dascal, *Leibniz. Language, Signs and Thought*. John Benjamins Publishing Company.
→ Dascal
- 1988 Patrick Riley, *Leibniz, The Political Writings of Leibniz*, 2nd ed..
- 1992 H. R. Parkinson, *Leibniz, De summa rerum: Metaphysical Papers*, Yale University Press. → Yale
- 1992 Ursula Goldenbaum, *Leibniz, Philosophische Schriften und Briefe, 1683-1687*. → Gold
- 1993 Richard BODÉÜS, *LEIBNIZ-THOMASIVS correspondence, 1663-1672*, Librairie philosophique J. Vrin. → Corres
- 1994 René Sève, *Leibniz; Le Droit de la Raison*, Bibliothèque des textes philosophiques J.Vrin.
→ Sève
- 1994 Michel Fichant, *Leibniz, la réforme de la dynamique*, Librairie philosophique J.Vrin. → Fichant
- 1995 Marc Parmentier, *Leibniz l'estime des apparences*, Librairie philosophique J.Vrin. → Parmentier
- 1995 Brown, Stuart, ed., *Leibniz, Discourse on Metaphysics and Related Writings*.
- 1997 Woolhouse & R. Francks, *Leibniz's 'New System' and Associated Contemporary Texts*, Clarendon Press.
- 1998 Woolhouse & R. Francks, *G. W. Leibniz, Philosophical Texts*, Oxford Philosophical Texts, Oxford U. P.
- 1925 河野與一『ライプニッツ形而上学叙説』、哲学古典叢書3、岩波書店→河野『叙説』
- 1950 河野與一『ライプニッツ形而上学叙説』、岩波文庫→『叙説』文庫
- 1951 河野與一『单子論』岩波文庫→『单子論』文庫
- 1969 「世界の名著」25『スピノザ、ライプニッツ』中央公論社→「世界の名著25」
- 1976 園田義道『ライプニッツ論文集』日清堂書店→「園田論文集」
- 1981 増永洋三「人間の知的遺産」38『ライプニッツ』講談社→「知的遺産38」
- 1987 米山優訳『人間知性新論』みすず書房→「米山人間知性新論」
- 1989 「哲学」8、哲学書房→「哲学書房哲学8」
- 1988-1999 「ライプニッツ著作集」全10巻、工作舎→「工作舎著作集」
- 1999 井上龍介『ライプニッツ〈試論〉』晃洋書房→「井上試論」

《注》

- 1) 1923年、*G. W. Leibniz. Sämtliche Schriften und Briefe*. HRSG.v.d. Preussischen Akademie der Wissenschaften. として刊行が開始された。現在、*Sämtliche Schriften und Briefe*. HRSG. v. d. Berlin-Brandenburgischen Akademie der Wissenschaften und d. Akademie d. Wissenschaften in Göttingen.としてさらに刊行中である。
- 2) サイズ25×19cm.
- 3) もっとも、書簡についてはライプニッツの方からの発信だけでなく、相手方から受けたものも含ま

れる。

- 4) このうち、書簡受信者数だけでもほぼ1100名にのぼる。p.44、p.53の注49を参照。
- 5) 二三の例を挙げる。同書 S. 61の No. 118は、'G. M. V, 270-278'とあるが、'274-278'の誤りである。S. 62の No. 122は 'Dutens II. II, 236-238'とあるが 'II. I'の誤り。S. 71の No. 145は 'G. IV, 491-493'とあるが、'498-500'の誤り等、ページ付けに細かいミスがある。
- 6) この二つの数学関係のものについては、人名による索引書が、ライプニッツ数学の研究者である J・E・ホフマンによって *Register zu G.W.Leibniz Mathematische Schriften und Briefwechsel mit Mathematikern*. 1977, Olms.として出ている。
- 7) Emile Ravier の前掲書によれば115篇。SS.47-87.
- 8) パリに來たきっかけは、マインツ選帝侯の要人ボイネブルク男爵からのフランスへの派遣であり、いわゆるエジプト計画をルイ14世の外務大臣に説明する名目であった。cf. エイトン『ライプニッツの普遍計画』66-68ページ。
- 9) Swammerdam, Johann (-1680) は赤血球の発見や解剖学者としても有名だが、ライプニッツは昆虫の鋭い観察者として幾度となく言及する。特にチョウの完全変態については、例えば『弁神論』の序文=G6. 41、アルノーへの1687年10月9/19日の手紙=G2,123, cf. 『形而上学叙説』§22。没後、スワムメルダム著『自然の聖書』*Biblia naturae*, 1737-38. が出版される。
- 10) Hudde, Jan (-1704) はゲルハルト版『数学著作集』のなかでもライプニッツによってしばしば触れられる人物。彼は微分法に関してフッデに優れた仕事のあることを指摘した上で、自分の方法の方が計算が便利で困難さも少ないと言う。アルノーへの手紙1686年7月14/24日=G2,61。
- 11) Kircher, Athanasius (-1680) はイエズス会神父だが、広範囲にわたる関心の持ち主であった。1652-54年『エジプトのオイディプス』、1660年『シナ図説』などに、比較宗教的な著述がある。cf. ゴドウィン他『キルヒャーの世界図鑑』工作舎、1986。ライプニッツへの手紙は、例えば、1670年6月23日=Ak. 2. 1, 48f.
- 12) Fabri, Honorato (-1688) はイエズス会の神父で哲学者、数学者。1671年11月9日のローマからの手紙は、ライプニッツの『新物理学仮説』(1671年の春にロンドンの王立協会とパリの王立科学アカデミーに提出した。)に言及している。
- 13) Brescia はイタリア北部のロンバルディア地方都市。
- 14) Lana, Francesco (-1687) はイエズス会神父で物理学者、数学者。ここで触れられているのは1671年夏の手紙と思われる。Ak.2. 1, 141f.
- 15) Boccone, Paolo (Silvio) (-1704)。
- 16) Chevreuse, Charles-Honoré d'Albert de Luynes, duc de (-1712) はコルベール宰相の娘婿であり、数学者でパリ科学アカデミー会員のロヴェルヴァルが1675年に死んだ後、その後継者としてライプニッツを推薦した。しかし、結局、ライプニッツは1710年3月に会員になる。
- 17) Roanez, A.G. duc de (-1696) とはパリ滞在中に力学や数学について論じたようである。ミュラー『生涯と著作』SS.40, 42.
- 18) La Chaise, François de (-1709) はイエズス会の神父でルイ14世の聴罪司祭。
- 19) Carcavy, Pierre de (-1684) は王立図書館司書。ライプニッツの作った計算器に強い関心を示す。
- 20) Gallois, Jean (1632-1707) は数学者でパリ科学アカデミー会員。
- 21) Baluze, Étienne (-1718) フランス王立コレージュの教会法教授でもあった。
- 22) Thévenot, Melchisédech (-1692) は *Relations de diverses voyages curieux...* を1663年から1690年にか

けて出版する。

- 23) Perrault, Claude (-1688) は1700年に新発明の種々の計算器についての本を出し、ライプニッツはこれについての書評を「ライプツィヒ学報」(1701.5)に載せる。cf. Müller, S.172. ただし、Dutens版には収録されていない。
- 24) Lantin, Jean Baptiste (-1695)。
- 25) La Mare, Philibert de (-1687)。
- 26) Hardy, Claude (c.1605-1678) はシャトレ裁判所参事官で数学者。デカルトの友人でもあった。
- 27) Cassini, Giovanni (-1712) はイタリア出身で1669年に初代のパリ天文台長となる。カシニとも綴られる。土星の環の間いわゆる「カシニの空隙」を発見する。
- 28) Henry Oldenburg (-1677) のこと。学会誌 *Philosophical Transaction* の編集長でもあった。ライプニッツのマイnitz公国時代から交信が始まり、1677年の死まで続く。
- 29) 1673年4月19/29日に会員になる。
- 30) Zuylicom. ホイヘンス自身は 'Hugens de Zulichem' と綴る。Zuilichem の綴りもある。ライプニッツはホイヘンスのことを 'Seigneur de Zulichem' と呼ぶこともある。オランダの一地方名。
- 31) Huygens, Christiaan (1629-95) は1666-1681年の間、パリにいる。パリでライプニッツは直接数学や物理学の議論を交わし、その後20年の交信がある。この手紙ではホイヘンスがオランダにいるようであるが、おそらく療養のためハーグに帰郷中であったと思われる。cf. 『ライプニッツの普遍計画』94ページ。
- 32) 註10参照。
- 33) Craanen, Theodor (-1690) はライデンの哲学・医学教授
- 34) Leewenhock, Antoni van (1632-1723) は動物の精子の観察等、顕微鏡によって生物界を拡大したということで、王立協会の会員になる。『顕微鏡で明らかにされた自然の秘密』(1695)。
- 35) Lincker (Lyncker) von Lützenwick, Johann (-1698) はマイnitz選帝侯(後にはトリエール選帝侯)枢密顧問官。
- 36) Habbeus von Lichtenstern, Christian (-1680) はフランクフルト・アム・マイン駐在のスウェーデン大使であり、すでに1669年にライプニッツをヨハン・フリードリヒ公爵に推挙し、ライプニッツはそのときに公爵から招聘されていた。cf. Müller, S. 17. ハッペウスからライプニッツあての手紙 1669.12.10 (NS) = Ak1.1,210-212 = アカデミー版全集第1部第1巻210-212ページ。
- 37) Strauch, Johann (-1679) は著名な法律家。
- 38) Hermann Conring (-1681) はヘルムシュテットの著名な法律学者。アリストテレスの方法論とデカルト以降の新哲学のそれとに関する往復の書簡が20通近くある。
- 39) Mauritius, Erich (-1691)。「帝国」とは「神聖ローマ帝国」のこと。
- 40) Portner, Johann Albrecht von (-1687)。
- 41) Geier, Martin (-1680)。
- 42) Kochanski, Adam Adamandus (-1700)。
- 43) Ak.1.2,15-17。
- 44) 1695年4月16日 (NS) ライプニッツの S・フーシェへの手紙=G1,420=ゲルハルト版ライプニッツ哲学著作集第1巻420ページ。
- 45) 1676年6月23日、ニュートンからオルデンブルクを介してライプニッツへ手紙が出される。これがいわゆる「ニュートンの第一の手紙」(ライプニッツを褒め、二項定理について述べる)であり、

同年8月25日にオルデンプルクからライプニッツあてに出される。さらに11月4日にもニュートンから同様の仕方でライプニッツあてに出されるが、ライプニッツに落掌するのは半年後のようである。

- 46) 注49参照。
- 47) Dutens 版全集、6.1, 65ページ。
- 48) 啓蒙思想家ヴォルテールは、ライプニッツの残した書簡のうち、幾何学の分野のものについては良く承知していたようである。その大著『ルイ十四世の世紀』(1751-56)において次のように言い残している。「幾何学者の出し合った問題は……どんなものでも、ドイツなり、イギリスなり、イタリアなり、フランスなりで必ず解けた。哲学者間の文通が、これほど広範にわたったことはかつてない。ライプニッツは、この動きに拍車をかける」(岩波文庫、巻3、101ページ)。
- 49) 2002. 10. 17付けの電信メールは以下のとおり。
-The Edition has really 100 volumes, possibly a little more.
- Information:
- Der Nachlaß von Leibniz wird von der Handschriftenabteilung der Niedersächsischen Landesbibliothek Hannover betreut und umfaßt etwa 50000 Stücke, das sind 150000 bis 200000 Blatt. Dazu gehören 15000 Briefe von und an 1100 Korrespondenten.
-
- Brigitta Buhe
Akademie Verlag
- 50) 工作舎「ライプニッツ著作集10」『中国学・普遍学・地質学』のなかに「プロトガイア」として訳出されている。